

学校をより 充実するための ファーストステップ

学校評価システムの効果的活用

C 地域や保護者
児童生徒にも
評価を広げて
みよう

新たに
チャレンジ
してみよう

今度はこれで
やってみよう

もう少し
変えてみよう

取組を
評価してみよう

まずは
やってみよう

現状を踏まえて
企画・立案しよう

平成15年7月

鳥取県教育委員会

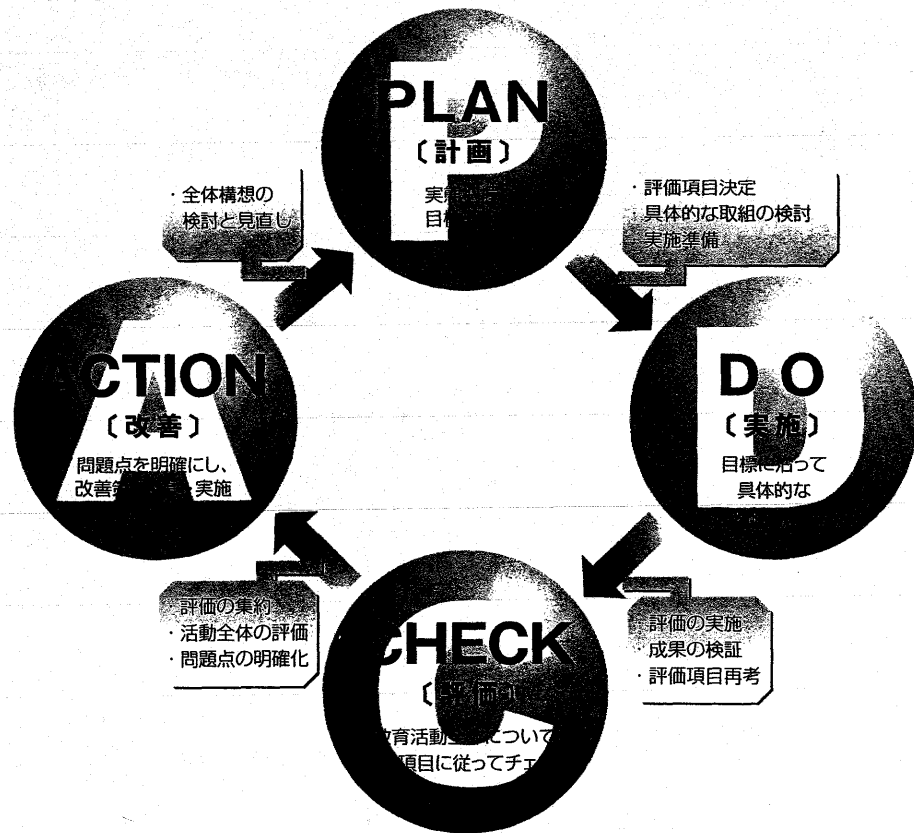
学校評価システムって何？

学校現場ではこれまでも様々な取組が行われてきました。
しかし、目標を達成するための

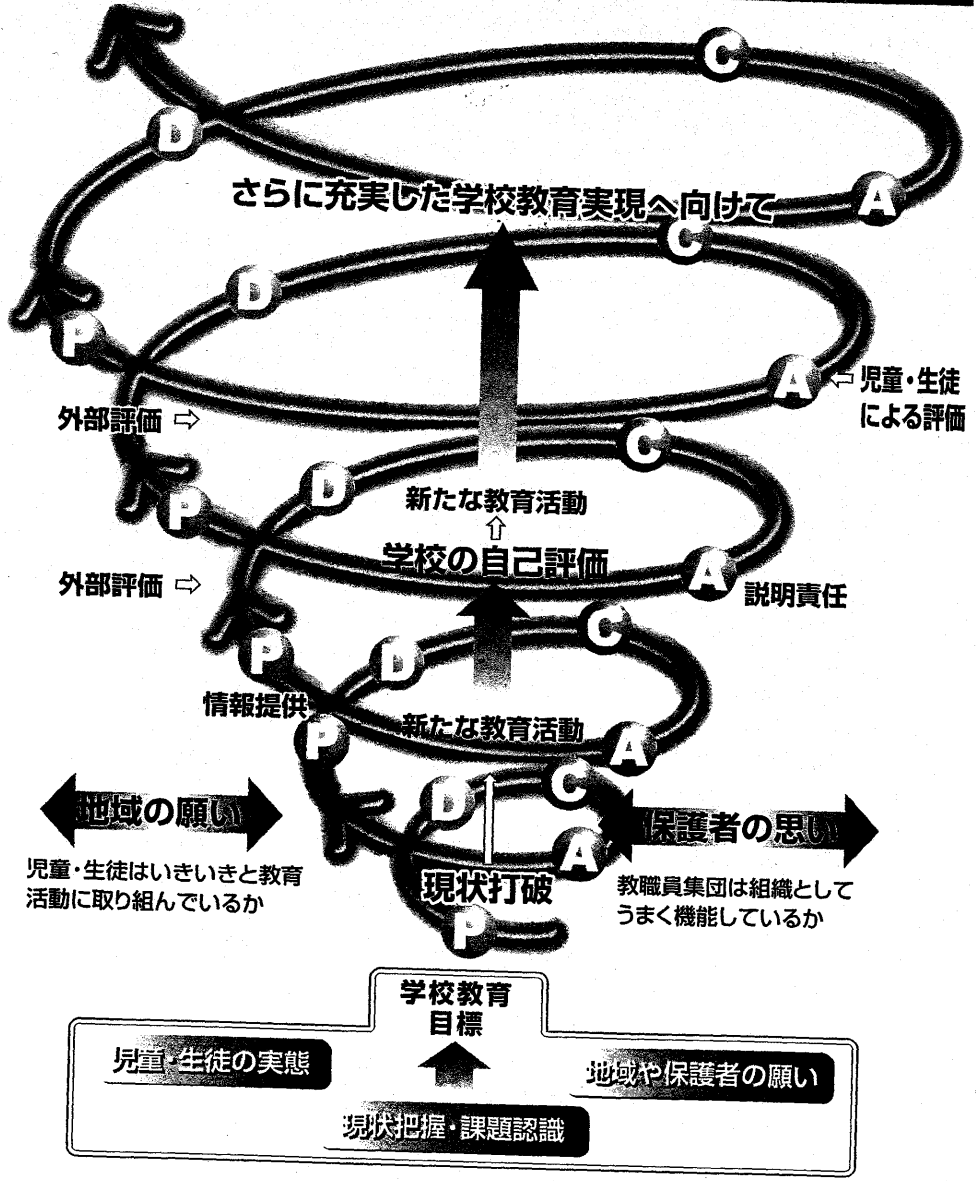
P (計画) → **D** (実施) → **C** (評価) → **A** (改善)

が的確に行われ、めざす学校像に近づけたでしょうか。

「学校評価システム」とは、より充実した学校づくりをめざして取り組む **現状把握**・**計画立案**・**実行(実施)**・**振り返り(評価)**・**改善策の構築**をサイクルとした一連の活動及び機能をいいます。

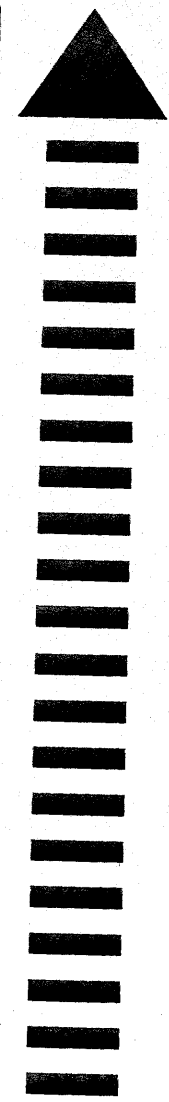


学校評価システムは どのように活用するのでしょうか



学校評価システムを機能させるには どうすればよいのでしょうか

- 組織マネジメントによる人材育成**
 教職員の組織的機能の充実に働き、個々が十分に能力を発揮し、意欲や自信をもって教育活動に取り組める学校現場を実現する。
- 成果の検証と公表**
 教育活動を振り返り、目標に照らしてその達成状況を見極め、結果について学校内外に情報提供をおこなう。
- 課題の抽出と計画の見直し：→C→A→(P→)**
 教職員自らの評価に、客観的な外部評価も加えながら、課題を明確にし、更なる教育活動の充実に向けて目標を設定し、計画を立案する。
- 具体性のある計画の立案と実行：→P→D→**
 分かりやすい具体的な目標を掲げ、その目標の達成をめざし、全教職員の共通認識のもとで教育活動を展開する。
- 目標に向かう意欲、実践力**
 教職員みんなが学校をよりよくしていこうという意識を持ち、目標に向かって行動できる集団となる。
- 学校の現状をしっかりと把握**
 児童生徒や地域の実態、そして自らの教育活動を振り返り、課題や問題点を明確にする。



学校評価システムをスタートさせるには まず何から始めますか

まず、みんなができることから取り組みましょう。

一人一人が自らの授業を振り返ってみましょう。

- ① 授業の計画を立て、事前準備はできていましたか。
- ② 授業に子どもたちが積極的に参加し、目標を達成することができましたか。
- ③ 子どもたちの学習状況を把握し、授業の課題を発見することができましたか。
- ④ 授業の課題を踏まえて、次の授業の改善への手だてを考えることができましたか。
- ⑤ 次の授業で工夫を加えるポイントを整理することができましたか。



たとえば、このように日々の授業実践を見つめ直してみてもいいでしょう。

学校全体での活動についてはどうでしょうか。

- ① 学校目標を意識したならい活動ごとに設定されていますか。
- ② 計画立案において、事前に子どもたちの実態を把握し、発達段階を考慮した活動内容が組み立てられていますか。
- ③ 評価項目を設定し、活動についての評価がきちんと行われていますか。
- ④ 実施前後の説明が地域や保護者になされ、声が反映されていますか。
- ⑤ 次年度への課題や問題点を明確にし、改善への手だてが考えられていますか。



学校の教育活動を、時には弱肉強食で、またある時には聖域で眺めてみることも大切ではないでしょうか。そのためには、授業や学級経営の場面で、また、学校経営の場でもPDCAサイクルを有効に活用しましょう。

このような観点から、今の学校の現状を振り返ってみてはどうでしょうか。そこから、これからの出発点が見えてくるはずですよ。

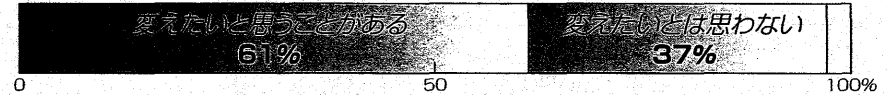
学校評価システムを導入することは、決して新たな課題を提起することではなく、今の取組に工夫や改善を加えることで学校の機能が活性化し、より充実した教育活動が創出でき、しかもそこから生まれる充実感や達成感が、生き生きと輝きのある学校づくりにつながるのです。

評価と公開

学校の自己評価等及び情報の積極的な提供については、学校が地域や保護者の信頼に応え、また開かれた学校づくりを推進し、学校としての説明責任を果たしていく観点から、設置基準に規定され、その実践が法的にも求められています。

学校を変えたいと 多くの教員が思っています

平成14年度に鳥取県教育センターが教員を対象に調べた結果があります。めざす学校づくりに向けて「変えたいと思うことがありますか?」という問いに



と、多くの者が「変えたいと思うことがある」と答えています。しかし、変えたいと思うことがある者の中で、96%の人が変わっていないと感じています。

「なぜ変わらないのか」という問いに対して、(複数回答)

- ・検討する時間がない 37%
- ・自分自身の働きが足りない 34%
- ・たぶん変わらないという雰囲気がある 32%
- ・組織はあるが機能していない 20%
- ・同僚間に遠慮がある 19%



という答えでした。

先進実践校からの声

○ 新設校の運営にあたり、校長として考えたことは「保護者や地域と一体となった学校づくり」でした。「私たちの学校だ!」という思いで一緒に創っていきたい。そのためには、魅力ある学校でなければならないと、懸命に教育活動の創造に取り組んできました。とにかく、学校のことを保護者や地域に伝えることだと考え、学級通信などで積極的に情報公開を進めてきました。

以前から比べると比較にならないほど多くの学級便りを全クラスがそれぞれの通信として保護者に送ってきました。そして、職員と共にやってきたことを保護者に問うことにしました。
〈H15年3月 岩美町立岩美南小学校長〉

○ 総合的な学習の時間を展開することを軸として、独自のカリキュラムづくりを進めてきました。子どもの学びを支える環境を創ることをめざす中で、地域の(人と情報の)ネットワークづくりは欠かすことのできない要素です。

まず、授業公開などで学校の実態を示し、学校経営連絡協議会をスタートさせ、子どもの実態や学校の教育方針の浸透度について話し合いました。私の校長としてのマネジメントについても、独自の自己評価の取組「学校経営診断」などにより、常に問い直すことを繰り返しています。
〈H15年3月 倉吉市立久米中学校長〉

